宇宙人丸山と人間嫌いな俺

テレサ二号

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悲しい事件をきっかけにバイオリンを止め、夢を失った少年が夢に向かって真っ直ぐに努力する少女と出会い、失った夢を取り戻しと凍った心を溶かしていく。

目次

♪1　気になる転校生 ―――― 1
♪2　部活探しは放課後で！ ―――― 18

♪1　気になる転校生

「なぜ、お前はいつもそうなんだ!!なぜ兄さんのようにできないんだ!!」
「お父さん、ごめんなさい……ごめんなさい……」
「お前なんか生まれてこなければ良かったんだ。お前がいるからみんなが不幸になるんだ!!お前なんかいなくなればいいんだ!!」
　そうして俺の景色は全て真っ赤に染まった。

「またあの日の夢か」
　俺は目を覚ますと汗をぐっしょりかいていた。
　最近は夢なんて見ないようになってたのに、今日は転校初日ということもあり心のどこかに不安があるのかもしれないな。全く情けない事だ。
　体を起こし、身だしなみを整える。
　新しい学校の制服に着替えて家を出る身支度をする。
「おはよー少年。今日から新しい学校だって?」

この人は小野寺　香菜（おのでら　かな）さん、バリバリのキャリアウーマンで某企業の国際営業部で仕事をしている。

両親がおらず、親戚関係を転々としていた俺を半ば強引に引き取り一緒に暮らしている。

「それが新しい制服だね？中々凛々しいじゃないか！うんうん！」

「おはようございます香菜さん。今日から新しい学校に通わせていただく予定になってます」

「そっかそっか！新しい学校では友達沢山できるといいね」

「いえ、友達なんていりません。俺に関わると不幸になりますので」

「またそんな事を言って……。それじゃあ、僕が君に関わっても不幸にならないって証拠にならないとね！」

「香菜さんも俺と暮らしたくないと思ったらいつでも仰ってください」

「バカを言っちゃいけないよ。こんなにも可愛い義弟と暮らしたくない訳が無いさ」

「またそれですか」

「そんな事より朝ごはんできてるよ！」

「ありがとうございます。冷めてしまっては悪いのでいただきましょう」

「「いただきます」」

俺と香菜さんは朝食を食べ始めた。
先ほどの俺の会話が気になったのか、香菜さんはとんでもない提案をしてきた。
「そうだ少年。新しい学校は元女子校で女の子が多いって聞いたよ？」
「らしいですね。俺には関係のない話ですが」
「あれ？じゃあなんでこの学校にしたんだい？」
「……。女の子が多い方がハッピーだろうと香菜さんが勝手に決めたんですよ」
「そうだっけ？だったら少年も恋愛をしなさい!!」
「唐突にどうしたんですか？」
「恋愛は灰色の世界に彩りを加えてくれるって言うだろ？」
「誰の言葉ですか？」
「私の言葉だよ！」
「……」
「よし、少年の今年の目標は彼女を作ることにしよう!!」
「香菜さんに彼氏ができたら考えますよ」
「う……、痛い所を突くね君は。まぁ、僕は仕事が恋人のようなものだからね!!」
「香菜さん、世間ではそれを社蓄と言うんですよ」

「ほほう、少年も言うようになったね。それで？どうだい？彼女を作ってみたら？」
「善処してみます。……ご馳走さまでした。それでは学校に行ってきます」
「あぁ！ちょっとだけ！ちょっとだけ待って!!」
「???」
　出掛けようとした俺を香菜さんは引き留め、満面の笑みで弁当を差し出して来た。
「愛妻弁当だぞ♪」
「香菜さんは妻ではありません」
「ぶーー。ツレないなぁ……。まぁ気をつけて行ってきなよ」
「はい、ありがとうございます」
　俺は弁当をカバンに入れると花咲川学園へ向かった。

　学校に向かう途中、俺は素通りできない状況に遭遇した。
　可愛い可愛い子猫を中型犬が吠えて威嚇している。
　今にも飛びかかりそうだ。
　　素通りする
　　↓猫を助ける
　大好きな猫が襲われているのに見て見ぬふりをすることは俺にはできなかった。

「さてどうしたものか……」
俺はブレザーを脱ぐと右腕にぐるぐる巻きにして犬と子猫の間に割って入った。
良くか悪くか犬は飛びかかってきたので右腕のブレザーに噛みつかせ、振り回したあげくブレザーごと投げ飛ばした。
それに驚いた犬はその場から走って逃げていった。
「もう大丈夫だよ」
「にゃー♪」
か、可愛い……。
撫でてやると手のひらを舐めてくる。
このままだと無限に可愛がれそうなのだが、時計を確認すると予定よりだいぶ遅れている。
「バイバイ」
俺はボロボロになったブレザーを拾うと学校へ向かった。
「ブレザーどうしよう……。香菜さんに謝るかな?」

花咲川学園に着くと早速職員室に向かい、自分のクラスは二年B組と説明を受け早速教室に案内された。

クラスの担任に教室の前で待っているように指示され、ＨＲが始まると簡易的な紹介の後に教室に入るように促された。
教室に入ると生徒の視線が俺に注がれる。
珍しい動物でも見るような視線に正直嫌気が差した。
「では自己紹介をお願いします」
「古澤　晃です。よろしくお願いします」
「古澤君？他には何か無いの？」
「ありません」
「そ、そうですか……」
これでいい。
余計な情報は掴み所を作るだけ。
掴み所が無ければ余計な会話をしなくて済む。
「で、では丸山さんの隣の席へ」
俺の自己紹介に担任も含め皆少しひいているようだ。
それでいい。誰も俺に興味を持つな。
得意気に椅子に座ると隣の女子が声を描けてきた。
正直意外だった。

「私、丸山彩。よろしくね古澤君」
「どうも」
俺から”よろしく”という言葉は返さない。
彼女は”え?”と言った表情を見せた。
これできっと俺に関わって来る事はないだろう。
そんな俺を含め授業が始まった。
最初の授業は国語だ。
正直国語は嫌いな教科だ。
特に嫌いなのは心情問題。
[この時の碧志君はどう思いましたか。]
そんなもの知らない。
碧志君に聞いてくれって感じだ。
一度テストでそう解答した所、翌日先生から呼び出された事がある。
発言の自由は憲法で認められているはずなんだが。

そんな事を考えていると隣から丁寧に折り畳まれた手紙が飛んできた。
飛んできた方向を見ると丸山さんがこちらを見ていた。

どうやら彼女からのようだ。
『やっほー／（^ ^）／
まん丸お山に彩りを♪丸山彩です♪
古澤君って音楽聴いたりする？
どんな音楽が好きなのかな？』
冒頭の呪文のような言葉は何だ？
俺は手紙の余白に返事を書くと折られていた通りに戻し丸山さんへと投げ返した。
丸山さんは嬉しそうに手紙を開いたがその表情は一瞬で暗くなった。
『授業に集中してください』
俺からはこれだ。
これできっと彼女が俺に関わって来ることは無いだろう。
俺は授業に集中しているフリをして丸山さんからの視線を受け流した。
国語の授業を終え、数名の女子が俺に興味を示している素振りを見せたので俺はそそくさとイヤホンを取り出し、外の世界と自分を切り離した。
音楽を聴きながら小説を読む。
これで誰も俺と関われない。
案の定、俺に声を掛けようとしていた女子達は皆散って行った。

次の授業中、またしても隣の丸山さんから手紙が回ってきた。
……。この人はあれか？宇宙人なのか？空気が読めない困ったちゃんなのか？
あれだけ関わるなオーラを出したのにまだ関わってくるとは普通の人間ではないな？
『さっきイヤホンで何聴いてたの？』
これは俺の失態だ。
さっき自分で掴み所を作らないと言っていたのに、丸山さんからの手紙の内容を忘れていた。
これでは仕方がない……。
『クラシックです』
手紙を投げ返すと恐る恐る手紙を開封すると嬉しそうにこちらを見た。
悔しいがちょっと可愛い気もする。
続けて何かを書いてこちらに投げてきた。
『クラシックってカッコいいね！
どんな曲を聴くの？
アイドルソングとか興味無いかな？』
『バイオリン協奏曲が多いです。

アイドルソングにはあまり興味無いです』
『そっか……残念。
今度オススメのバイオリン協奏曲があったら
教えてね♪
古澤君ってバイオリン習ってるの？』
自然な流れでこの質問はおかしくない。
しかし俺はどう答えたものか悩んでいた。
それが仇となった。
背後から近づく男に気づかなかった。
「古澤……楽しそうだな。ん？」
「……スミマセン」
「手紙の相手は誰だ？」
「前の高校の友達です」
「授業中だぞ？」
「そうですね」
「廊下に立ってなさい」
今時そんな文化あるんだな。

俺は席を立ち廊下に向かう、ドアに手をかけた時丸山さんが立ち上がった。
「あの！手紙は私が勝手に書いて渡したんです！だから古澤君は悪くありません！」
「いえ、俺が返事を返したのが悪いんです」
「では二人とも廊下に立ってなさい」
「「……はい」」
正直訳が分からない人だ。
俺はバラすつもりもないので廊下に立つ必要が無いのにわざわざ自己申告してくるなんて。
この人はMなのか？もしくは一周回ってSなのか？
「ゴメンね古澤君」
「??」
「私がしつこく手紙を送ってたから先生に怒られちゃって」
「別に問題はありません。そもそも英語の授業は特に受ける必要性を感じませんので。ただ丸山さんが自ら名乗りを上げたのが理解できません。黙っていれば廊下に立つことも無かったのに。廊下に立つことに憧れでもあるんですか？」
ん？
今度は丸山さんが俺の質問の意図を理解しかねるといった表情をしている。

「だって私から始めたのに古澤君だけが怒られるのっておかしくない？」
「そうですか？そもそも手紙が見つかってしまったのは俺のミスです。なので丸山さんが責任を感じる必要はありません」
「ううん。そんな責任を擦り付けるようなことはできないよ」
「あなたの信条は分かりました。ですがこれで分かったと思います、俺と関わると不幸になるので俺と関わらない事を強く勧めます」
俺は隠し持っていた小説を取り出し読み始めた。
これ以上はあなたと議論を交わすつもりはありませんという意思を態度で示した。
「ねぇねぇ古澤君」
俺は言葉と態度で関わらないと示したはずだ。
やはり彼女には俺の意図が伝わらないようだ。
「私とお友達にならにゃい？うぅ……なんで大切な所で噛むかな……」
話の流れが全く理解できない。
先ほどからあんなに言葉や態度で関わらない方がいいと示しているのに、何故執拗に関わってくるのか。
彼女の気持ちや考えは理解できない。
しかし俺の答えは決まっている。

「……」

俺は彼女の提案を拒否できなかった。

何故かは自分でも分からない。

友達になりたいなんて人生で一度も言われたこと無いし、言われないようにしてたから戸惑い、納得のいく答えが得られるまで保留にしておきたかったのかもしれない。

きっとそうだ。

そんなこんなで昼休み。

さっきからの答えが全く思い浮かばない。

とにかく香菜さんが作ってくれた弁当を食べよう。

「……!!」

俺は開いた弁当を瞬時に閉じた。

恐ろしいことにご飯に桜でんぶでハートマークがデカデカと書かれていた。

周囲を見渡したが誰とも目が合わない……。

良かった、誰にも見られてないようだ。

隣を見ると丸山さんがこちらを見ている……。

見られたか？見られてないか？
今の俺にそれを聞く勇気は無い。
仕方ないので人気のない所で昼食を食べよう。

俺は屋上に向かった。
屋上には鍵がかかっている。
しかし屋上前の踊場は事務員によって綺麗にされていて、その上窓や蛍光灯もあり明るい。
しかも予備の机と椅子があり、とっても一人で過ごすには持ってこいの場所だ。
「今日からここを楽園（エデン）と呼ぼう」
「エデンってどういう意味なの？」
「うぉ!!ま、丸山さん!?」
「こんな所で一人で食べないで一緒に食べない？」
「お断りします。俺は一人になりたいんです」
「どうして一人になりたいの？」
「先ほども言いましたが、俺に関わると不幸になるんです」
「そっか……」

どうやらやっと納得してくれたようだ。
「そういえばさっきのお弁当可愛いかったね？」
「み、見ていたんですか!?」
「愛妻弁当かな？」
「いえ、ただの義理の姉の嫌がらせです」
「ふーん、ねぇ？お弁当の事、紗夜ちゃんとか燐子ちゃんとかに話してもいい？」
丸山さんが俺を試すような視線で見つめてくる。
それは困る。ただでさえ丸山さんが関わってくるのも問題なのに他の人まで関わってくる可能性はどうしても摘んでいたい。
「1つ……」
「???」
「俺に出来ることなら何でも言うことを聞きます。だからこの事は丸山さんの胸の内に閉まっておいてくれませんか？」
「何でも？」
「俺に叶えられる範囲なら」
「だったら私とお友達になってくれない？」
「またそれですか……」

「何でも言うことを聞いてくれるんでしょ？」
　これは身から出た錆び。仕方ない。
「分かりました。ただし条件があります」
「条件？」
「1つ、丸山さんが友達を辞めたいと思ったらすぐに言うこと。2つ、俺が話したくないと言った事は追及しないこと。3つ、他の友達との用事があるときは必ずそちらを優勢すること。この3つです」
　丸山さんは真剣に悩んでいる。
　おそらく俺の言葉を一つ一つ自分の中に閉まっているのだろう。
　本当にいい子だと思う。正直俺なんかが関わっていい部類の人間ではないだろう。
「分かった。私からも1つ条件を出してもいい？」
「構いませんよ」
「嫌な時は嫌だって言ってくれていいから、嘘だけは付かないで？」
「俺は器用な方ではありません。俺の本音が貴女を傷つけるかもしれませんよ？」
「うん。嘘をつかれるよりずっといいよ」
「分かりました」
「じゃあ約束ね♪」

丸山さんは小指だけ出した手のひらを差し出してきた。
「これは？」
「指切り!!」
「指切り？」
「ほらっ！古澤君も！」
丸山さんは俺の小指と自分の小指を絡めてくる。
「ゆ～びきりげんまん♪嘘ついたらハリセンボンのーます♪ゆびきった♪」
可愛らしい歌声で歌い上げた後、少し照れながら丸山さんは指を離した。
「えへへ♪」
生まれて初めてした指切りはとても柔らかくてどこか暖かかった。

♪2　部活探しは放課後で！

丸山さんとの約束を終えた俺は、屋上前の空いたスペースで昼食をとっていた。
何故か丸山さんと一緒だ。
彼女に一人で食べないのか確認したところ
『お友達っていうのは、一緒にお弁当を食べるものなの！』
という彼女の謎な理論により、一緒に昼食を取ることになった。
「そういえば、さっきの手紙の続き聞いてもいい？」
「ご自由に」
「バイオリン習ってるの？」
正直この質問が一番来て欲しくなかった質問だ。
先ほど先生に手紙が見つかったのもこの質問で悩んでいたからだ。
俺は理由を誤魔化そうと思ったが
『嘘だけはつかないで』
という丸山さんの言葉が頭から離れなかった。
「辞めました。バイオリンを習うこともバイオリンを弾くことも」

「どうして辞めちゃったの？」
過去の記憶がフラッシュバックしてくる。
辞めた理由を彼女に説明できるはずが無かった。
だから最もらしい理由をつけた。
「俺に才能が無かったからです」
これは本当だ。俺に才能が無かったから、あんな事になった。
「何かをするのに才能なんて必要ないよ！」
意外にも丸山さんが熱くなっている。
彼女なりに何か思うことがあるのだろう。
「バイオリン嫌いなの？嫌いになっちゃったの？」
その質問は自分自身で何度も何度も問いかけた。
答えなんてもうとっくに出ている。
でも俺にバイオリンを弾く資格はない。
だからその気持ちに蓋をしたんだ。
「その質問には答えたくありません」
俺は丸山さんの目を真っ直ぐ見て言えなかった。
「……そうだ！古澤君、今日の放課後時間ある？」

「放課後ですか？まぁ無くはないですが」
「だったら部活動見学に行かない？無理に入る必要は無いけど、一度見て回るのも楽しいと思うんだ」
　確かにそろそろ新しい事を始めた方がいいのかもしれない。そうすればきっとバイオリンの事なんて忘れてしまえる。
「分かりました。では放課後に」
「うん、楽しみにしてるね！私、ちょっと用事があるから先に行くね！」
　丸山さんは手早く荷物を片付けると、こちらに手を振り去って行った。悔しいけどその仕草が少し可愛く見えた。
　しかしこれは嬉しい事だ。
　残りの昼休みは有意義に過ごせる。
　俺はクラシックに耳を傾けながら、小説に視線を移した。

　そしていよいよ放課後がやってきた。
　荷物を纏めて隣の席を見ると丸山さんがニヤニヤしながらこちらを見ている。
「帰る準備はできた？」

「はい、済みました」
「それじゃ行こっか♪ウチは元々女子高だったから、運動部は男子が入るのは難しいかもしれなくて、弓道部と文化系の部活しか見学依頼できなかったんだけどいいかな？」
「むしろありがたいです。俺は運動とか苦手なので」
「そうなんだ！私も運動は苦手だから良かった！それじゃあ、案内するね？」
彼女はスキップで俺の前を進む。
あんまりいいリズムでは無い。
丸山さんは抜けてるとこがありそうだから、転びそうだな……。
「ひゃっ!!」
言わんこっちゃない。
丸山さんは前のめりに思い切り転けた。
不可抗力ながら丸山さんのスカートの中身が見えた。
「水色のしましま」
「……え？キャー!!」
丸山さんはスカートの丈を押さえながら、涙目でこちらを見てきた。
「み、見た……？」
「正確に言えば見えました。こういう場合はご馳走さまですと言うのが正解ですか？」

「うぅ……／／／」
何故か丸山さんは俺の胸をポカポカ叩いてくる。
痛くは無いが何故叩いてくるのか分からない。
「こ、これは貸しだからねっ!!／／／」
「俺のパンツを見せれば貸し借り無しになりますか？」
「み、見せられても困るよ!!」
「ではどうしろと？」
「今度何らかの形で返して貰う！／／／」
勝手に見せておいて貸しとは中々の迷惑な話だ。
とにかくこれ以上貸しを作らないように気を付けないと。
そんなこんなで今回の部活動見学唯一の運動部である、弓道部を訪れた。
静かな空間が正直俺には合ってるなと思った。
「初めまして、同じクラスで風紀委員も務めています。氷川紗夜です」
「初めまして、古澤晃です」
「あのね！紗夜ちゃんは学年２位でとても頭がいいの！」
「学年２位ということはいつも一番が取れていないということなので、決して誇るべきことではありません」

「でもでも、凄いことには変わらないよ?」
「それは丸山さんの意見に同意です」
「古澤さん、いつの間に丸山さんと仲良くなられたんですか?」
「いえ、仲良くはなっていません。成り行きで一緒にいるだけです」
「うう……酷いよー」
「では今日は見学ということで練習を自由にご覧になってください。入部の有無はそこまで重要視しませんから、古澤さんにとって実りのある時間になればと思います」
類は友を呼ぶと言うが、この氷川さんと言う方は丸山さんとは真逆の人間だと思う。
整った顔立ちは丸山さんと通じるものがあるが、落ち着いた立ち振舞いに綺麗な言葉遣い正直どれも丸山さんには不足している能力だ。
月とスッポンとはこの事だ。
「今、失礼な事を考えなかった?」
「考え過ぎです」
昔読んだ本に書いてあった女の子という生き物は勘が鋭いというのは本当らしい。
「それでは早速実演に移らせいただきます」
氷川さんが弓を構える。
その美しく神々しい姿に、思わず俺たちは息を飲んだ。

そしてそこから放たれる白羽の矢は容易に的の中心を射抜いた。
「「おぉー!!」」
条件反射で声と拍手が出た。
それほど素晴らしい演技だった。
「凄いよ紗夜ちゃん！」
「ありがとうございます。古澤さんはいかがでしたか？」
「大変素晴らしかったと思います。凛として美しく、それでいてカッコ良かったです」
「美しい……ですか？」
俺はどこかで地雷を踏んでしまったのだろうか？
氷川さんはほんのり顔が赤い。
「ちょっと古澤君!?何で紗夜ちゃんはベタ褒めなの!?」
「ベタ褒めですか？俺はただ思ったことを述べただけですよ？」
「とにかく！私達は次に行くね？」
「氷川さんありがとうございました」
丸山さんは俺の背中を押すように次の部活へと急いだ。

「あの二人微笑ましいですね。もっと仲良くなれたらいいですが」

続いて美術部に見学に行ったのだが、俺には美術の才能は全く無い事が判明したので美術部の詳細は割愛させてもらう。

続いての茶道部である、教室の一角に畳を敷いて茶道具が並べてある。

陶器の茶碗達がいい味を出している。

その中で丸山さんと友達と思われる二人が声を掛けてきた。

「若宮イヴです！彩さんとは一緒にお仕事させていただいてます！今日は彩さんの新しいお友達の茶道部の部活動見学ということで気合いを入れておもてなしします！」

「それで……着物ですか？」

「そうです！これが趣という物です！」

「な、なるほど……。おもてなし感謝します。申し遅れました、古澤晃と申します、よろしくお願い致します」

「彩さんのお友達ということは私にとっては先輩に当たりますので、お気軽にイヴとお呼びください！私は晃さんと呼ばせていただきます！」

こ、この子はグイグイ来る子だな……。

俺は苦手なタイプかも。

「イヴちゃん、あんまりグイグイ行くと古澤君困っちゃうよ？」

グイグイ来る若宮さんを青髪の少女が間に入って押さえてくれる。

正直助かる。

「えっと……私は松原花音です。二年Ａ組で古澤君と彩ちゃんとは隣のクラスで彩ちゃんとは同じバイト先だよ」

「よろしくお願いします。つまり、若宮さん、松原さん、丸山さんは同じバイト仲間ということですね？」

「違うよ？」

「え？先ほど若宮さんは丸山さんと一緒にお仕事していると仰っていたと思うのですが？」

若宮さんと丸山さんは一緒に仕事をしていて、松原さんと丸山さん一緒に働いているのに松原さんと若宮さんは一緒に働いていないとはどういう事だ？

新手のナゾナゾなのか？

「と、とにかく！今日は部活動見学なんだから、私の事は置いといて早速実演に入ろう？」

とっさに話を切り替えた……怪しい。

まぁ丸山さんにも触れて欲しくない事があるのかもしれないな。
自分の事は話さないのに、相手の事を聞くのは野暮という物だ。
「私としたことが大変失礼しました！それでは早速茶を立てさせていただきますね」
茶道具の横に腰を降ろした若宮さんが丁寧に茶を立て始める。
丸山さんと俺は若宮さんに勧められ練り切りを食べ始めた。
「お先にいただきます」
「ん～♪おいひいね♪」
確かこの黒文字という楊枝のようなものを使って食べるんだったよな。
「晃さん、作法の心得があるんですか？」
「いえ、先ほどスマホで軽く調べました」
「え？いつの間に？」
「丸山さんがＴｗｉｔｔｅｒで何かを調べている間です」
「うぅ……私もちゃんと調べていれば良かった……」
「作法なんてお互いが楽しみ合う為のマナーみたいな物なのでそこまで気にしなくても良いと思います」
「晃さんの仰る通りです。彩さんが来てくださっただけでも私は嬉しいです！」
「イヴちゃん……ありがとう！」

俺も少し悪かったかもしれない。
作法など気にせず楽しもうとする気持ちが無かったかもしれない。
「さぁお茶が立ちましたので召し上がってください！」
「いただきまーす♪……うぇ……苦いよ……」
「それがわびさびという物ですよ彩さん！」
丸山さん酷い顔してる。
「アハハ……」
「あっ！晃さんが笑いました！」
「え？気のせいでは無いですか？」
俺が笑った？
そんなはずは無い。
笑顔なんて遠い過去に置いてきてしまったはず。
「……」
「彩ちゃんどうかした？」
「え？……ううん、何でもない！」
どうしたのだろうか？
丸山さんの顔が少し赤くなっている。

俺に笑われたと思って恥ずかしくなったのか？

まぁとにかく抹茶をいただこう。

「ん……」

口の中に強い苦味と共にほのかな甘味と香味が広がってくる。

そして抹茶のだまが出来ないように丁寧に丁寧に立てた若宮さんの人柄がしっかり出ていた。

「結構なお手前で」

わびさびというのか心落ち着く雰囲気に多少心が惹かれた。

しかし茶道部に入る訳では無いので、これでお暇させていただこう。

「では俺たちはこれで失礼します」

「また抹茶が飲みたくなったら、いつでも立ち寄ってください！」

「週一回しか活動してないから、来たくなったらいつでも言ってね？」

「はい、ありがとうございます。また寄らせてください」

俺と丸山さんは茶道部を後にすると、その後は何個かの部活動を見学したがこれといった部活は無かった。

吹奏楽部と軽音部はちょっといいなと思ったけど……。

「丸山さん、これで最後ですか？」

「あと管弦楽部で終わりだよ！」

管弦楽部か……。

正直一番行きたくないかもしれないな。

でも、見に行くだけ行ってみよう。

音楽室に着くと、窓から練習を見学させてもらう。

管弦楽部というからヴァイオリンやチェロだけかと思ってたけど、クラリネットやトランペットなどもありしっかりオーケストラ用の楽器は揃っているんだな。

「♪～♪～♪♪♪」

音の統率が取れていない。

個人個人で見ればそこそこ演奏できる人がいるが、指揮者の勉強不足が目立つ。

そしてヴァイオリンの演奏者達の呼吸が一番合っていない。

これは演奏者のレベル云々の問題ではない。

それに気づいているのか、金管楽器の演奏者が演奏に気を使っているな。

まぁ、俺には関係無いが。

ベートーヴェンの『ロマンス　第２番ヘ長調　作品５０』。

ベートーヴェンが１７９８年に作曲したヴァイオリンと管弦楽のための楽曲でとても有名なクラシックだ。

「何かみんな格好いいね」
「音がバラバラです。これならオーケストラと呼べませんよ」
「彩!!」
丸山さんの知り合いと思われる人が駆け寄って来る。
少し慌ててるみたいだ。
「ゴメン、今日は先輩達の機嫌悪そうだから早めに上がってくれないかな?」
「そうなんだ?ゴメンね?ありがとう、行こう古澤君!」
「そうですね」
「ちょっとアナタ達!!」
先輩と思われる人の声に驚いた丸山さんが声の方向を向く。
どうやら俺たちに言ったようでは無かった。
「コンマスである私の足を引っ張らないで!やる気あるの!?」
確かにあのコンマスは下手では無い。
そして慣れてない子もいるのか、確かに音が遅れそうになっていない所もある。
「いい!?私は区内のコンクールで上位を取った優秀なバイオリニストなの!!アナタ達凡人とは違ってコンクールの練習もしなくちゃいけないんだから、下手なアナタ達に付き合ってられないのよ!」

「酷い……」
　丸山さんがボソリと呟いた。
「あの人の言い分も分からなくもないですよ。ただ不慣れの人もいるから、それを考慮してあげないと可哀想ですね」
「いい!?アナタ達凡人が都内代表コンクールに出る私と演奏できるってだけで光栄な事なの!!下手は下手なりに足を引っ張らないようにしなさいよ!!」
「それな言い方はあんまりだと思います!!」
「丸山さん!?」
　部外者の俺たちが入っていくのは問題だって!!
「上手い人だけがオーケストラを作ってる訳じゃないんです!!みんなで演奏するのがオーケストラだと思います!頑張っているみんなの努力をアナタが否定しないでください！」
　丸山さんの言い分は分かる。
　でも努力だけじゃ音楽は成り立たない。
　やはり才能が必要だ。
「アナタこそ何様なの!?部外者が勝手に入って来て口出ししないでちょうだい!!」
　俺は慌てて丸山さんと先輩の間に入った。

「部外者が失礼しました。コンクール頑張ってください。ほらっ、丸山さん行こう！」
丸山さんって温厚でポーっとしてる人かと思ったのに、意外と感情的になるところもあるんだな。
俺が丸山さんの腕を引っ張ると俺たちは音楽室の出口へ向かった。
「アナタ、あのＰａｓｔｅｌ＊Ｐａｌｅｔｔｅｓの丸山さんね？アナタ達の新曲聴いたわ」
Ｐａｓｔｅｌ＊Ｐａｌｅｔｔｅｓ？新曲？何の事だ？
丸山さんって音楽活動しているのか？
「アナタ酷い歌声ね……。才能無いんじゃない？そんなことで良くボーカルが務まるわね!?」
「うぅ……」
「きっとメンバーもアナタがボーカルで迷惑だと思っているわ！」
丸山さんは泣きそうになりながら膝をついた。
顔は相手に見えないように隠している。
俺は丸山さんに肩を貸した。
「アナタ達凡人は辞めてしまえばいいのよ!!」
先ほど俺は確かに〝才能が必要〟だと言った。

しかし辞める辞めないなんて本人以外に決める権利は無い。
俺は珍しく感情的になっていた。
「丸山さん、少し椅子に座っていてください」
俺は丸山さんを椅子に座らせると先輩を睨み付けた。
「先輩、ヴァイオリンに自信があるなら俺にヴァイオリンを教えてくださいよ」
「あら、アナタもヴァイオリンを弾くの？」
「いえ、才能が無かったので辞めてしまいました」
「アナタも凡人なんじゃない」
「ですから、今からアナタと同じポジションで『ロマンス　第２番ヘ長調　作品５０』を弾きますから、どこが悪かったのかアドバイスをください」
俺は音楽の授業用にあったヴァイオリンを手に取ると音の確認をした。
安物だが悪くないな。
「皆さんも余興に付き合わせてしまって申し訳ありませんが、一曲だけ俺にお力を貸してください」
指揮者は困っているようだったが、他の先輩方が乗り気だったので演奏を始めることとなった。
「♪～♪♪～♪」

ヴァイオリンを弾くのは久しぶりだが、やはり身体が覚えている。
全く違和感なしに演奏に入れた。
まずはヴァイオリンの経験が浅い人達を音でリードしながら、オーケストラという方舟をコントロールしなければ。
俺の演奏に合わせ、チェロやヴィオラ、コントラバスが主旋律を奏でる。
このコントラバスは中々巧いな。
続いてトランペットやクラリネットが音を奏でる。
さっきよりは音が纏まって来た。
指揮者のイメージを上手く纏めて演奏者との中継になる。
コンマスはこれでいい。
「ふーん、多少はやるみたいね」
「……／／」
先輩は俺を値踏みするように見つめ、泣き止んだ丸山さんはずっとこちらを見ている。
問題ない、人に見られるのは慣れている。
曲も中盤に差し掛かり、コンマスの見せ場であるソロがいよいよやってきた。
先ほどまでは調和に力を注いできたがここだけは俺が主役。

遠慮はいらないな。

「♪♪～♪～♪♪♪」

艶の入った音で周囲を魅力する。

正直、コンマスの役割よりソロの方が遥かに自信がある。

「……」

先輩も言葉を失っているようだ。

そしてヴァイオリン舞台に気を抜かないようにアイコンタクトを送っておく。

「♪♪～♪～♪……」

演奏を終えるとコントラバスの人が走ってきた。

「アナタ素晴らしいわ！是非ウチに入ってよ！」

「いえ、もうヴァイオリンは弾かないと決めているので」

俺は先輩に歩み寄ると見下しながら捨て台詞を吐いた。

「これが才能です……。アナタも凡人だったようですね。アナタは井の中の蛙だ！大海を知ってください！そして、楽器をするしないを選べるのは本人だけだ！他人にどうこう言う資格は無い」

俺は教室を出た。

すると過去の映像が一気にフラッシュバックしてきた。

俺はトイレに駆け込むと胃の中の物を全て吐き出した。

「うぇ……」

しばらくトイレで吐いていた俺は無意識に校舎のうらかわに来ていた。

ベンチに倒れ込んだ俺は、目の前が真っ白になり気絶した。

『お前に才能は無い……、兄さんのようにはなれない。だからお前はヴァイオリンを弾く資格も無いし、俺の息子として必要無い。何故、お前何かが生まれて来たんだ！』

『でも僕、ヴァイオリンが好きなんだ……。だからヴァイオリン続けたい……』

血飛沫が舞う。

『黙れ！お前ごときが俺に口答えするな！この古澤家の面汚しが!!』

何度も何度も血飛沫が舞う。

『お父さんごめんなさい……。ごめんなさい……。生まれて来てごめんなさい……』

『……くん、……くん！古澤君！しっかりして！』

俺は意識を取り戻した。
どうやら夢を見ていたようだ。
「丸山……さん……？」
「うん、凄くうなされてたけど大丈夫？」
「はい……。大丈夫です……」
そして落ち着きを取り戻した俺は、真上に丸山さんの顔があることと頭の下にとても柔らかい感触があることに気がついた。
「あの……これって？もしかして？」
「言わないで!!／／あとこっち見るのも禁止!!／／」
丸山さんに目を手で隠される。
こうすると頭の下の感触に意識が行ってしまって俺も少し恥ずかしい。
「……／／」

「……情けないでしょ？」
「???」
「俺、ヴァイオリンを弾くと吐き気がして酷い場合はさっきみたいに気絶しちゃうんです」
「……」
「俺、何か寝言呟いてました？」
「ううん、それは大丈夫」
「だったら良かったです」
「それとね？」
「???」
「情けなくないよ？ヴァイオリン弾いてる姿はちょっとカッコ良かったよ？私、ヴァイオリンの事良く分からないけど、あの中で古澤君が一番巧いのは分かった」
「……だったら鑑賞料をいただかないといけませんね」
「えっ!?私あんまりお金持ってないよ？」
「……もう少しだけこのままでいさせてください」
「……特別だからね／／／」
安心したのか、しばらくすると俺は意識を手放した。

ただし今回は過去の夢なんて見る事は無かった。

「『生まれて来てごめんなさい』か……。彼にどんな悲しい過去があったんだろう？私なんかが、軽い気持ちで踏み込んじゃダメだよね？」